metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by
provided by Kwansei Gakuin Univer

2015年度活動報告　交換授業：オンデマンドIB（会話・聴解・作文）

大河内 瞳（関西学院大学日本語教育センター）
早川 杏子（関西学院大学日本語教育センター）

1. クラス概要

本授業では、初級段階における会話場面に応じた口頭表現力および文章表現力を養うことを目標とし、会話・聴解・作文活動を通して、運用を中心とした授業を行った。

授業は週２コマで、１コマで１つの課を進め、『みんなの日本語本冊』Ⅰ・Ⅱ[1]の 14 課から 32 課までを扱った。それぞれの語彙・文型が用いられる場面文脈を提示するために、随時『できる日本語』初級及び初中級[2]本冊のトピックや絵、図表などを用いた。

2. 授業内容

本授業では、活動に入る前に、毎回「この練習を通してできること」という目標を４段階で設定し、到達目標の評価表を示した。場面文脈として提示された絵や図表をもとに会話活動を行った後、到達目標評価表に記入させ、発話を自己モニターさせた。

また、『初級からの日本語スピーチ』[3]を参考に、前後半合わせて２回の合同授業でポスター発表を行った。前半は、学生同士で質疑応答を、後半には日本人ラーニング・アシスタント（LA，８名）に来てもらい、学生と共に質疑応答をしてもらった。

さらに、発話力向上のために何をすればよいか、という学生同士の話し合いから、１分間スピーチを取り入れたクラスもあった。

3. 成果と今後の課題

今回、口頭表現力を養う方法の一つとしてポスター発表を取り入れたが、その効果は２点ある。１点目は、学生同士や LA という明確な応対相手がいたことで、発話に対し強い動機付けが働いたことである。学生たちは、伝えたい内容に基づいて未習の言語表現があれば調べ、質問への対応を考慮に入れて自発的に推敲を重ねていた。２点目に、１回目にうまくいかなかったとしても、回を重ねるごとに発表を改善し、より良くなっていく手ごたえを感じることができた点である。初級レベルであっても、ポスター発表における定型表現を事前に教示することで、アカデミックな活動は十分可能だと感じた。今後はフィードバックの仕方を工夫することを検討課題としたい。

---

1 『みんなの日本語Ⅰ 第２版』(2012)、『みんなの日本語Ⅱ 第２版』(2013) スリーエーネットワーク
2 嶋田和子監修　できる日本語教材開発プロジェクト著『できる日本語初級本冊』(2011)、『できる日本語初中級本冊』(2012) アルク
3 国際交流基金関西国際センター『初級からの日本語スピーチ』(2004) 凡人社